

### 位置と環境

本遺跡は、田代町川原郷ノ原字ホケノ頭にあり、佐多町と田代町の町境にある標高890.8mの木場岳を源とする雄川と赤瀬川に挟まれた標高約200mの丘陵地上に位置する。遺跡の立地する台地は南東に傾斜しており、端部は八ツ手状に開析されている。遺跡の所在する丘陵地東側を流れる小川と遺跡との比高差は約50mである。

### 調査の経緯

本遺跡は農免農道整備事業計画に伴い田代町教育委員会が鹿児島県農政部からの依頼を受けて、県教育委員会の協力を得て、調査を行った。調査は平成11年11月15日から12月17日までの24日間にわたり実施した。調査面積は1,000㎡である。

### 遺構と遺物

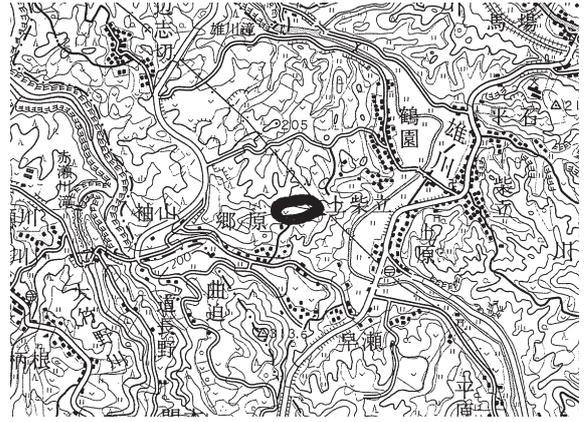
農免農道建設ということで調査区は狭小ながらも縄文時代早期の遺物が多量に出土している。出土遺物は前平式土器や岩本式土器、それらに伴う石斧などの石器である。

本遺跡でもっとも注目されるのが岩本式土器の完成品の集中区で、3×4mの範囲に完形に近い個体が約10個体まとまって出土している。調査区が狭小なためその場所がどのような活動の場であったかを知るための手がかりは少ないものの、集中区の中に集石遺構が1基検出されているのが示唆的である。

また、多数出土した岩本式土器の中には口縁部内面にベンガラが塗彩されているものが5点出土している。付近からはベンガラの原料と考えられる赤鉄鉱や、ベンガラの加工に使用されたと考えられる赤色物質の付着した石皿なども出土しており、該当期のベンガラ加工の様子が伺われる初めての例となった。岩本式土器の内面にベンガラを塗彩する例は過去にもいくつか知られていたが、いずれも薩摩半島においてであり、本遺跡での発見により大隅半島まで広く赤彩技法が普及していたことが明らかとなった。

次に石器についてであるが、本遺跡では61本の石斧、13点の磨製石鏃をはじめ、打製石器、石槍、スクレイパー、楔形石器、磨石・敲石、凹石、石皿、砥石など多種多様な石器が出土している。

石斧は刃角の浅いものが多く、中にはノミ状のも



第1図 ホケノ頭遺跡の位置

のも見られ、形態も多種多様である。石斧を整形するときの剥片や刃部を形成に使用されたとと思われる砥石も多数出土しており、使用目的に応じて様々な形態のものを製作していたことが考えられる。

また、石皿、磨石、凹石なども多数出土しており、植物質食料用の加工を行っていたことも考えられる。

磨製石鏃は南九州の縄文時代早期前半に特徴的に見られるが、本遺跡でも13点確認されている。非常に薄く、実用に耐えられるようなものではなく、特別な意味を込めて製作されている可能性が高い。

これらの遺構・遺物を総合的に考えると、ホケノ頭遺跡では土器の製作から石器製作、調理、木の加工や植物質食料の加工など、生活を行う中での様々な活動が行われていた様子がかがえる。調査を行った面積は遺跡範囲のほんの一部に過ぎず、調査区周辺にはまだまだ多くの遺構・遺物が残されている可能性が高い。

### 特徴

岩本式土器はこれまで出土例がいくつかあるが、完形品に近い土器が一括と認められる状況で出土したことにより当土器には同じ時期でも様々な口縁部文様パターンが存在することが判明した。また、岩本式土器と前平式土器がレベル差をもって出土したことにより型式学的に確立された岩本式土器から前平式土器への流れが層位的にも裏付けられた。

### 資料の所在

出土遺物は、田代町教育委員会に保管されている。

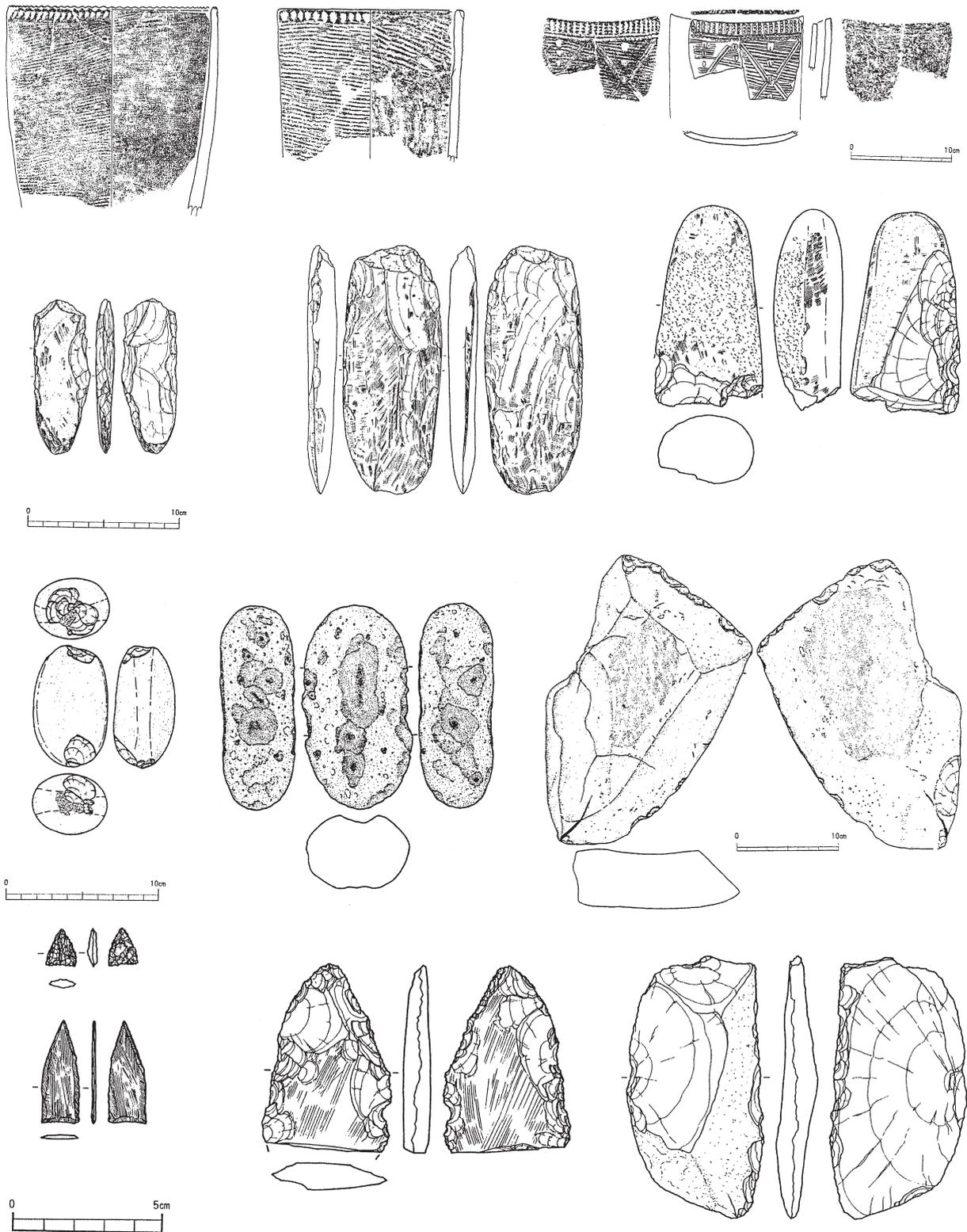
### 参考文献

田代町教育委員会2001「ホケノ頭遺跡」『田代町埋蔵文化財発掘調査報告書』4

(桑波田武志)



第2図 岩本式土器の集中区



第3図 出土遺物